ARTKISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行 http://www.camk.or.jp [2007.冬号] vol.31

ARS KUMAMOTO

アルス・クマモト —熊本力の現在

熊本市現代美術館

2006年12月23日(土)～2007年3月4日(日)

■開館時間:午前10時～午後8時(展覧会入場は7時30分まで)
■休館日:火曜日
■観覧料:一般800(600)円、高・大学生500(400)円、小・中学生300(200)円、熊本市内小・中学生は無料(名札など証明できるものをお持ち下さい。)( )内は前売及び20名以上の団体料金、ただし、小・中学生は団体割引のみで前売はありません。※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、または熊本市民で70才以上の方は割引があります。

浜田知明《Serpentの門》、2004年、熊本市現代美術館蔵、撮影:矢加部咲

アラーキー密着取材！　2006.10.30／11.11

第18回熊本市民美術展熊本アートパレードの審査員として、天才アラーキーこと荒木経惟さんをお迎えしました。
まず審査、そして開会式、講演会と2度にわたるご来熊でした。
荒木さんのトレードマークの髪型と個性的なメガネ、そして、サスペンダー。熊本の街を歩くたびに、人々の視線は荒木さんに注がれていました。審査はとても和やかな雰囲気で行われました。たびたび発せられる、「いいね～」「おかしいね」「すごいね」の数々。時には、真剣な表情も交えながら、じっくりとすべての作品を見て審査されました。講演会会場は超満員。荒木さんを待つ人々の熱気で満ちあふれていました。荒木さんは、会場に入って来られるなり、大きな声で「おおお！すごいね！」との一言。荒木さんの興奮が会場全体に伝わり、来場者の気分も一気に盛り上がりました。「アラーキー愛を語る」と題した講演は、江戸東京博物館で開催中だった「東京人生」ご出品の作品を中心にスクリーンで画像を投映しながら、作品ひとつひとつについての解説を荒木さんご自身がしてくださるというもの。作品に込められた思いやエピソードを熱く、そして愉快に語って下さいました。豪快な笑い声がとても印象的な荒木さんですが、亡くなられた妻陽子さんのお話になると、言葉が詰まり、会場では涙を拭くお客様も見受けられました。
講演会が終わり、私たちスタッフと荒木さんは小さな打ち上げをしました。ジュースで乾杯！すべての過程が終了し、みんなで心から楽しくお話しました。次は、ATTITUDE2007で荒木さんにお目にかかれることと思います。とても楽しみです。(N.I)

写真撮影：坂本豊さん

隣のスミちゃんコンサート　坂本スミ子ー優しさをあなたに　2006.11.19

「熊本アートパレード熊本市民美術展」の関連イベントとして、坂本スミ子さんをお招きしてコンサートを開催しました。昨年の「横尾忠則ー熊本・ブエノスアイレス化計画」の関連イベント「坂本スミ子ラテン歌謡ショー」に引続き、2度目のご出演です。実は、現代美術館のすぐ近くにお住まいのスミ子さん。「隣のスミちゃん」のネーミングも非常に気に入って下さり、コンサートの依頼も快諾して下さりました。ユーモアに溢れながらも心がじーんと暖かくなるお話に聞き入る会場の皆さん。コンサートを聞き終えた後は、皆さんとっても優しい気持ちになられたのではないでしょうか。また、コンサート終了後、私たちスタッフにまで差し入れをして下さり、大変心優しくチャーミングなスミ子さんでした。(A.A)

モクモク工房　10.12／11.9「花器」　11.9／12.14「自由制作」

毎月第2木曜に開催するモクモク工房。10－11月は「花器」をつくりました。筒状のシンプルなものから曲線を活かしたユニークなシルエットのものまで、みなさんの個性が光る花器になりました。四季の花々もより美しく見えるのではないでしょうか!?11-12月は「自由制作」。これまでの制作で鍛えられた技を活かして、出来上がりを想像しながら夢中になってつくりました。お皿やカップなどの定番の食器には模様を入れて華やかに、小物入れに愛らしい人形を添えるなど、遊び心満載の楽しい作品ができあがりました。(A.T)

第31回熊本県高等学校美術展審査　2006.11.13

年1回開催される、県下高校美術部の活動の成果を発表する展覧会に出品されたたくさんの力作のなかから、今年の熊本市現代美術館賞として、映像作品《等身大愛劇場》（佐伯桜子・井島由紀美・神山美紀・古嶋恵美・二子石有里・早田亜由美・植田あずさ・司馬唯佳、県立第二高校）を選ばせていただきました。
マンガ、アニメ、ゲーム、プリクラが日常に大量に存在する世代ならではで、実写の静止画面にふきだしや効果線などがどっさり書き込まれますが、その手作業の多さにも制作への情熱と思い入れが感じられました。作品時間10分ほどですが、ストーリーに、戦闘シーンから、ラブコメ、推理ものまで盛込み、見る者を飽きさせません。
この作品に決めさせていただいた最大のポイントは、なによりも、仲良しグループが楽しみながら作った様子がひしひしと伝わってくる点でした。(H.T)

熊本の華人展vol.3　2006.12.1－3（前期）、12.6－8（後期）

今年も熊本市現代美術館の花の祭典ともいえる「熊本の華人展vol.3」が開催されました。今年の華人展では、通常の華展とは違う視点でお花を楽しんでいただこうと畳のコーナーを設け、座ってお花を観賞していただいたり、流派の紹介コーナーを設け、さまざまな流派を知っていただくための工夫を凝らしてみました。また初めて「いけばな一日入門ワークショップ」を21人限定で行い、21流派の先生方にマンツーマンでいけばなの手ほどきをしていただきました。和気藹々とした雰囲気の中、花を通して参加者との会話を楽しまれている先生方が印象的でした。「剣山に枝を挿すのは結構力が必要だった。ためらいをなくしすっと入れるとうまくいき、これは他のことにも通じるコツだと思った。作品ができあがると立ち去りがたく、いい時間と空間を味わうことができ感謝しています。」（アンケートより）(E.Z)

GⅢ vol.42　「熊本の写真家」シリーズ第2弾　「光と感情－10人の視覚－」展（2006.10.11－11.19）

昨年に引き続き「熊本の写真家」シリーズ第2弾「光と感情－10人の視覚－」展が開催されました。熊本の写真界を代表する10人の写真家たち、岡田二郎、緒方信行、小崎宇一、小林雄治郎、坂本玖爾子、島田有子、西崎喜一、堀川宏、宮川一郎、宮崎喜一（五十音順）によるこの展覧会では、写真という一つの枠の中での表現ながら、まったく違った表情を見せるそれらの作品に写真表現の奥深さを感じることができました。スポットライトの中に浮かび上がる、写真を愛し表現し続ける写真家たちの雄渾な写真世界に、訪れた人々はじっと見入っていました。(S.Y)

GⅢ vol.43　点字絵本の世界展（2006.11.22－2007.1.8）

当館では開館当初からキッズサロンに点字絵本を開架していますが、それは健常者に点字を知っていただくためのもので文字のみを点訳したものです。今回展示している点字絵本は『絵』そのものも点字で表現されている点字絵本です。色鮮やかな絵ではありませんが、指先から伝わる感触で絵本を楽しむという行為を通して、自身の五感の豊かさを再確認させてくれる空間となりました。「小さなポチポチがいろいろな世界へと導いてくれる不思議な国の素晴らしい絵本ですね。初めて見られてとてもよかったです。」（アンケートより）(E.Z)

SUITOTTO Kumamoto

［スイトット・クマモト］

本年度のスイトット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。（インタビュアー・構成：鷺座江美）

＊いける＝花を生かす、ことと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【洗心雲林派編】

吉村宗月先生がいけばなを始めようと思ったのは、洗心雲林派の華展を観に行ったときに、当時の家元のみずくぐりという古典生けを観て感動したのがきっかけだという。習い始めた当初はなかなかまっすぐに生けることができず、教わっていた先生が手直しするとまっすぐになるのがくやしくて練習に励みましたとひとこと。先生の探究心がうかがえるエピソードだと思った。また合気道もたしなまれる先生は、道を究めるという点ではいけばなにも通じるものがあると思いますというお話や、流派を超えていけばなを学ぼうと、草心流の板垣先生が中心となって男性だけで結成された「むからの会」に参加し研鑽をつまれていたというお話からも、先生のいけばなに対する思いが強く伝わってきた。ついつい生けてしまうお花をお聞きしたところ、都わすれとのこと。あくなき探究心をお持ちの先生には存在感のある濃紺のテッセンがお似合いだと思った。

熊本の華人展vol.2大作

熊本の華人展vol.2大作

【草月流編】

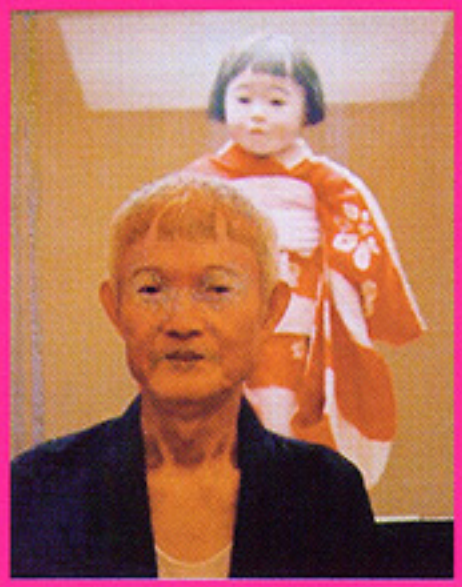
お話をお伺いしたのは、ショートカットが素敵な立石佳宵先生。ふたりのお姉様もそれぞれ池坊、未生流をなさっていらしたという。「以前は年頃になるとお花とお茶はみんなやっていましたからね。姉たちと違って私は自由奔放に生けていたように思います」とおっしゃる先生に草月の特徴をお聞きしたところ、「現代を生きる感覚がいきいきと脈打っている感じでしょうか。花を生かさなければならないので技術は絶対に必要ですね」という力強い言葉が返ってきて、生けこみのときの真剣なまなざしの先生が思い出された。いけばなの楽しみとはなんでしょうかという問いには、「無心になって生けているときも楽しいですが、みんなで作り上げていく過程がとても楽しいです」と語る先生がついつい使われるお花は、オンシジュームやカラーとおっしゃっていたが、先生には見ているだけで明るく楽しい気持ちになるグロリオサがぴったりだと思った。

アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第4回／秀島由己男(ひでしま・ゆきお)さん　(from 日本)

1934年水俣市生まれ。熊日総合美術展を通して海老原喜之助や美術評論家土方定一に見出され、画家として本格的なスタートを切る。



《空蝉シリーズ》、2004年、50点組、熊本市現代美術館蔵

Q1　《空蝉シリーズ》についてお聞かせ下さい。

このシリーズは50点組で成り立っていますが、これくらいの量をまとめたほうが、ひとつの仕事として鮮明になると思いまして空蝉の連作としました。テーマは３つくらいに分かれています。でも全体としては、霊的な幻想性などという共通のものがありますので、違和感はないと思います。制作期間としては、１－２年間の仕事でした。
シリーズを始めたきっかけは、以前、熊日の松下博さんから、従軍記者の人から頂いた遺品を私がお預かりいたしまして、それを撮っておいたモノクロームの写真があめ色に変化していまして、その中に当時の人々の苛酷な一齣を幻のように描き加えたら、なにか伝わるものがあるのではないかと考えて、その作品の制作を仕終えました頃、体を悪くしました。そのため、小腸を20ｃｍくらい摘出する手術を受けまして、退院しましたあとに、八代へ幽霊の絵の展覧会を見に行きました。その頃の私は、鏡を見ましたらやせ細っていて幽霊みたいでした。「これ、これ！」と幽霊の絵と自分を重ね合わせて描いてみました(笑)。今は健康でふっくらしてきているので、この作品はこの時しか出来ないものでしたね。私は、病気をしたので面白い世界が描けたのだと思いまして、これは、怪我の功名だと喜んでいます。私は小学生のころは養護学級にいまして、もともと体が弱くて、死というものが絶えず体にこびりついていまして、それで幻の中をさ迷いながら作品を生み続けている感じだと思います。
《空蝉シリーズ》の中に、生人形展と関係したものがあるんですが、生人形展、１回目も２回目も本当に素晴らしかった。人間と自然が一体になって生きていた時代を感じました。作品に映し出された表情もいいし、その描写力が素晴らしいと思いました。当時の作品には、見る人を魅了して止まぬ力を秘めているように思われます。いい意味での大衆性と高度な芸術性が作品にあると思います。

Q2　秀島さんの今後の展開について教えてください。

僕は、おどろおどろしたものが好きなんです。「四谷怪談」とか「雨月物語」とか。僕の作品では霊的なものの表現を必要としますが、浮世絵の緻密な美しさとか、生人形のリアルな奥深い描写力など、これらをなんとか自分の作品に表現できないかと思いつつ、出来上がったのが《変化十態》となりました。
画歴を振り返ってみますと、20代、30代、40代、50代と10年単位で自然とテーマが変わってきています。その折その折の心の思いが作品に表れていると思います。
僕がよくピカソに学ばなくてはいけないと思うのは、常に変化し続けたという点です。ダリやミロはあまり変化がなかったように思います。それは、壮年期に絶頂を迎えて、そのあとは自己模倣のようになってしまったように見えます。私を振り返りますと、水彩画から、ペン画、銅版画と技法の移行がありまして、主にモノクロームの世界を描いてまいりましたが、心の中では、色彩で描きたい、描きたいと思いながら、黒と白の世界にのめりこんでいました。ルドンもモノクロームから素晴らしい色彩の世界に晩年移行するでしょう？あの禁欲が解けた感じはとても共感できます。僕もそろそろ版画を捨てて別のものをやりたいと思っていた時期だったのです。《空蝉シリーズ》ではカラー写真に描きこみましたが、実のところ、この技法もそろそろ終わりにしようと思っています。
《空蝉シリーズ》のうちの卵の作品はね、これから細密な油彩画での仕事にしようと思っているんです。10年かけて30枚つくります。描き終えたらそのお祝いに「生前遺作展」が出来れば嬉しいのですが、その頃には車椅子に乗っているだろうから、ゆっくりと押してもらいながら展覧会場をまわるんです、楽しみです。夢を心に描きまして、そのように成し遂げられますよう、頑張りたいと思います。

Q3　読者のみなさんにメッセージをお願いします。

例えば、道を歩いている時に、赤ちゃんを抱いたお母さんとすれ違う。その赤ちゃんをみてかわいいなと思う。赤ちゃんとも目が合って、ほほえんでくれる。無縁の人がすれちがいにお互いに幸せを感じる。赤ちゃんとは少し違いますが、そういう感覚で作品を受け止められれば、幸せですよね。表現する人と見る人が一体になれるというのはそういうことなんじゃないでしょうか。
生人形展でも感じたのですが、本当にいい作品は、目利きの人が「素晴らしい」と感じるだけでなく、そうじゃない人もそれまで感じたことのなかった感覚や体験が与えられるものだと思います。
僕は、生人形展などから得たものを、自分の作品に取り入れたいと思っています。作品作りは、僕の母胎にその折々の感情が胎児として宿り育ちまして、それらの思いが膨らんで生まれ出るのが作品だと思います。そういう風に１点１点、慈しみながら描いています。

＊ 最新作《変化十態》は、当館で開催中の展覧会「ARS KUMAMOTO　アルス・クマモト－熊本力の現在」に出品されています。
＊ つなぎ美術館にて「秀島由己男　心の記憶」展が開催中です(3月4日まで)。

Museum information

アジアフォーカス・イン・熊本　2006.10.4−9

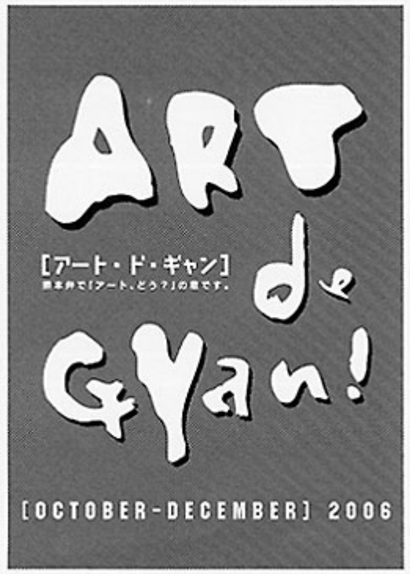
福岡以外での九州では初めてアジアフォーカスが開催され、熊本ではなかなか観られないアジアの秀作をお楽しみいただきました。なかでも印象に残ったのが「少女ヘジャル」(2001年トルコ映画)。クルド人の少女とトルコ人の老人との心の交流を描いた作品で、古い日本映画を思わせるような心の機微を繊細に描いた作品でした。西谷郁さん(九州大学韓国研究センター研究員)のトークショーでは、「アジア映画の特徴は、既に破壊された現状から未来へ向って再生する内容が多いこと」といった話が語られました。会期中何度も足を運んでくださった熱心なファンのためにも、今後も続けていきたい企画のひとつになりました。(E.Z)

CAMK4周年開館記念日インターナショナル・アドバイザー、ハイディ・ベネガス講演会「アートは人生そのもの－中南米の現代美術から」　2006.10.12

CAMK4周年開館記念日に、当館のインターナショナル・アドバイザーのハイディ・ベネガスさんの講演会が行われました。ベネガスさんは、プエルトリコ芸術大学教授として教鞭を取る傍ら、美術評論家として、また2006年のシンガポールビエンナーレのアドバイザーを勤めるなど幅広く活躍しておられます。
講演会は、ラテンアメリカの民族、歴史、文化から始まり、その土壌の中で美術がどのように展開されてきたのかを、アメリカ及びかつての宗主国との関係を交えながら語って下さいました。また、現代のラテンアメリカのアーティストの活動や、今日のアートを取り巻く状況についてもお話下さいました。
講演会ではプエルトリコの歌を披露して下さるなど、ベネガスさんのユーモア溢れる人柄で、会場は温かい空気に包まれ、多くの方から質問も上がり、CAMKにとって素敵なお誕生日となりました。(A.A)

CAMK人形劇「田舎のねずみと都会のねずみ」　2006.10.14

「生人形と江戸の欲望展」にちなんで行なわれているCAMK人形劇の最後を飾ったのは、人形芝居かすべるの新作「田舎のねずみと都会のねずみ」。今までの人形劇と大きく違った点は、「セリフがない」こと。それでもねずみのしぐさや、効果音で話の流れがわかるのが不思議。影絵や音楽をふんだんに使った新しいスタイルの人形劇に、子どもたちも大満足の楽しい時間になりました。(E.Z)



第35回熊本県立第二高等学校美術科制作展

2006.12.12-12.17　熊本県立美術館分館　熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

在校生による約100点の作品が並んだ大規模な展覧会であった。先の熊本県高等学校美術展ですでに発表されていた、一年生の共同制作《等身大愛劇場》は、自分の日常、実体験から離れることなく、さまざまなストーリーと手法に挑戦した新鮮な映像で、今後の更なる展開が期待される。また永田美里さんの《烏瓜》は、軽快な構成と透明感のある華やかな色彩が優しい印象を残す日本画であった。(Y.H)

小林雄治郎写真展[阿蘇]
ー記憶の中の風景によせて

2006.12.12-12.17　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

今秋、当館G Ⅲにて行った「光と感情－10人の視覚」展に出品して頂いた阿蘇在住の写真家、小林雄治郎さんの写真展。「阿蘇に住んで27年、発表の機会無きまま…」そんな長い歳月の中温められてきた写真には、阿蘇の自然が織り成す奇跡のように美しい一瞬が焼き込められていた。里を埋める霧の静けさや、糸のように下界に差し込む陽光、山々を彩る四季の木花が生々しく美しかった。そして、その1枚1枚から生涯のテーマと断言する「阿蘇」を慈しみ丁寧に見続ける写真家の温かい眼を感じることのできる展覧会であった。(S.Y)

Museum information

プレママツアー　2006.10.11

生人形展のプレママツアーが行われました。今回は特別ゲストに熊本市役所子育て支援課の保健師の先生にも参加していただき、有意義な情報を教えていただきました。写真は、カフェレガル内のリ・ウファンさんの絵のドローイングをツアー見学している様子です。(A.S)
＊アルス・クマモト展のプレママツアーは2月4日でした。

「城下町くまもと銀杏祭」が開催されました！！
2006.10.14－15

秋の中心市街地活性化事業「城下町くまもと銀杏祭」の関連イベントの一環として、当館にあるカフェレガルでも、「熊本の酒あいしてますか」と名付けられたプチ日本酒試飲会が行われ、店内には10数種類の清酒やワインが並び無料で振舞われました。
当日は中心市街地のストリート上で様々なアーティストがパフォーマンスを繰り広げるストリートアートブレックスの日でもあり、ホームギャラリーでは、熊本の古きよき時代の文化であったお座敷芸の再生を目指す東雲座の公演が行われました。張りのある歌声と、三味線、お琴、太鼓等による都都逸（どどいつ）、民謡、長唄が披露され、更にはお座敷遊びも知ることのできる楽しい夕方のひと時でした。
また、同じ頃下通界隈では今年で開催4回目を迎える「はしご酒大会」に参加すべく、参加チケットを握りしめた大人たちが今か今かと開始時間を待っていました。ルールは、受付でスタンプカードを受け取り、そこに指定されたお店を3軒はしご、それぞれの店で飲食を行ってスタンプをもらい、時間内に帰ってきて、豪華クーポンの当たる抽選会に参加するというもの。仕事を終えて駆けつけた美術館スタッフも、後ろ髪を引かれつつ3軒のお店を後にしましたが、2000を越える人々が黄色のスタンプカードを首に下げ、夜の中心街をほろ酔い気分で闊歩（かっぽ）する光景はまさに壮観。「また来年も参加したいねー」と上機嫌でうなずきあいながら更けた秋の夜長の銀杏祭でした。(S.Y)

第12回研翠会書展

2006.10.24-10.29　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

書家の田内研水さん主催の研翠会は一年おきに書展を開催している。女性の42名の53点のかなや調和体作品は、繊細な線の心地よいリズムや、丁寧な筆遣いが会場に満ちている。
田内研水さんは渡辺水巴（わたなべ・すいは）の歌を濃墨で流麗に示し、両側に淡墨で藤原信実（ふじわらののぶざね）の歌を添えるという工夫された表現である。細川幽斎の歌2首はリズムの変化や潤渇のきいた作品である。
芳田抱泉さんは島木赤彦の歌3首を手なれた筆さばきで見せている。松本紀子さんは凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）の短歌のかなを変化のある用筆で見せ、更に手づくりの対馬の若田石による龍神硯をも15点展示した。財津和子さんは自詠歌で明るい作品を屏風にしていた。中村天香・白鴎書道会長も萬葉集の秋の歌を賛助出品していた。(S.K)

田中みぎわ展

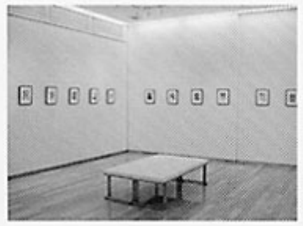
2006.10.31-11.6　くまもと阪神美術画廊
熊本市桜町3-22　TEL322-1111

熊本と東京にアトリエを構え、作品を制作する田中みぎわさんの新作を発表した個展。9月より熊本に滞在し、ずっと制作に集中していたとのこと。墨で風や水や空気の流れを描くのが彼女の仕事だが、今回出品された大作には、広い空と水が激しくざわめいているような動きが感じられた。「いつも描ける訳ではないんですが。いまはこういう広い空間に空と水がある作品が描ける時期なんです。」と田中さんは語る。小品にみられる繊細な描写力と、大作のダイナミックな筆の動きが対照的であり、作家が内面に持つ奥深い世界が伝わってきた。(H.T)

坂口恵子　さしえ原画展

2006.12.19-12.24　ギャラリー＆カフェ　TOTO
熊本市上通町5-46-3F　TEL352-7162

本展は、熊本日日新聞の夕刊（2006年4月13日～8月4日）に掲載されていた竹崎有斐作『石切り山の人びと』のさしえ原画を30点展示したものである。作品からは、温もり、懐かしさと切なさ、そしてユーモアが溢れ、人物が描かれていない作品からも常に人の気配が感じられた。微妙な濃淡のグラデーションで様々な情景が描かれており、バリエーションのあるモノクロ原画を楽しむことができた。また、車のハンドル、木の枝葉や根など、ところどころに散りばめられた白がアクセントになり、作品の表情をより豊かなものにしていた。(A.A)



第32回城心会書展

2006.10.24-10.29　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

書家の江口幹城さんが主宰する城心会書展は20－80代の82名が漢字や調和体書が主で100点余りを展示した。
今回は「こころの旅」をテーマとし、自作のことばなどで調和体を中心に漢詩（行書・草書・篆刻）・短歌・俳句を素材として書的に表現してみたという。江口幹城会長は、高野辰之作詞の「故郷」、「兎追ひしあのやま…」など2点を大作で見せていた。大石旭水さんは若山牧水（わかやま・ぼくすい）歌集の中の言葉を調和体でよくまとめて書いていた。
永田恵清さんはエジプト旅行の思い出を詩にまとめ、ピラミッドの形も入れたパネルで見せていた。小野野翠さんは小泉八雲の「日本の庭から」を木簡風に淡墨の調和体でとつとつと書いていた。宮本香舟さんは「奥の細道を行く」をかなの歌と調和体で自分流に書いていた。(S.K)

第34回　熊本県書道連盟展

2006.12.7-12.10　熊本県立美術館本館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

熊本県書道連盟が、熊本県文化協会と共催で、毎年開催している会員展である。漢字、かな、大字書、調和体書など各ジャンルの197人が派閥を越えて個性を競っている。今回の特別展覧では、昨年の「徳富蘇峰」に続いて「郷土に残る著名人の書」として「井上桂園」の書を紹介した。井上桂園（1903－1997）は熊本師範学校教諭をつとめ、文部省の国定教科書の執筆をされ全国でも有名であったが、特に県下の書写、書道教育には大きな功績を残した書道教育者でもあった。(S.K)

写真：会場風景、井上桂園氏の書

第47回熊日書道展

2006.12.19-12.24　熊本県立美術館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

熊日書道展は、県下最大の公募展であり、書家研鑽の場でもある。漢字、かな、近代詩文、少字数、篆刻、刻字の6部門の計489点の応募があり、215点の入賞・入選を展示。委嘱、無鑑査72点も並べていた。審査は、日展評議員の鈴木春朝氏と同監事の池田桂鳳氏が当たった。
会場には熊日賞の緒方翠陽さんの漢字「暮宿田家」をはじめ、県賞の山下静雨さんのかな「寒椿」、熊本市賞の三角貴志さんの漢字「王維詩」など、個性的な作品や多彩な表現が見られた。今回は入選率が4割2分と厳しかったが、作品は全国的に見てもレベルが高いと審査員は評していた。(S.K)

写真提供：熊本日日新聞社

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ　アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇ 第18回熊本市民美術展　熊本アートパレード

・ 友人から「出品したので」ということで見に来ました。多くの作品が見れてよかったです。市民の方がもっと多くのジャンル(金工など)から出品するといいですね。(35歳、男性、熊本市内)

・期待以上でした。多くの人の作品を見ることができてほんわかできた。(24歳、男性、福岡県)

・ 偶然に別の友人の作品に出合えて感動した。老人には広すぎて足を休めるコーナーがあるとよい。(73歳、女性、熊本県)

◇ 熊本の華人展vol.3アンケート

・ 今回は畳の間があり、いけ花を座って見るという今までにない点が良かったと思う。(68歳、女性、熊本市内)

・ ゆったりとしたスペースに広い空間、とても花が美しく見えました。(49歳、女性、熊本市内)

・テレビ(ビデオ上映)で各流派の活動も拝見できました。(76歳、女性、熊本市内)

・いろんな花がありました。花がとてもきれいでした。(7歳、女性、熊本市内)

・花材の表示が良かった。全部の花材が表示してあるとベターだったかも。(63歳、女性、熊本市内)

美術館への感想

・トイレはいいですね。アートロフトの催しもいいと思います。映画が2回、1回は昼間開催。階段の踊り場のお花達もステキです。(57歳、女性、熊本市内)

・ アブラモヴィッチ+タレルの読書室(ホームギャラリー)はとても心地がいいのでついつい眠くなってきます。(47歳、男性、東京都)

・ 朝日新聞で貴館を知り、学会のついでに立ち寄りました。ユニークで市民に身近で感心しました。(68歳、女性、北海道)

・ 日経新聞で第1回(連載)に取り上げられたので来ました。(？歳、？、東京都)

・美術館に初めて来ました。なんとなく寄っただけなのですが面白かったですねー！！ハマッてしまいそうです。読書コーナーもあって◎。(21歳、女性、熊本市内)

Letters from CAMKEES

熊本市現代美術館は、約260名のボランティアスタッフ「CAMKEES(キャンキース)」によって支えられています。

第2回目はピアノボランティアさんをご紹介します！

CAMK秋のピアノコンサート
2006.11.23

CAMKEESには資料整理、図書チェックなどいろいろなボランティアがありますが、毎日活動しているボランティアといえば、毎晩7時からホームギャラリーを彩ってくれているピアノボランティアです。現在の登録数は42名。大学生や主婦の方などピアノが大好きな皆さんが活動中です。そのピアノボランティアさんを一同に会しての「CAMK秋のピアノコンサート」が11月23日に開催されました。大好評だった春のコンサートに引き続き、それ以降にご登録いただいた方も加わって、今回は17名の方にご参加いただきました。日頃のホームギャラリーコンサートではBGMになるような曲を弾いていただいていますが、このコンサートでは何でもあり。ひとことずつコメントをいただきながら、いつもとはひと味違うピアノボランティアさんの演奏に、訪れた観客も大満足の楽しいひとときとなりました。「みなさんそれぞれ個性的でよかったです。素晴らしいですね。これからも頑張ってください。」「とてもよかったので、定期的に行なってください。」(アンケートより)(ピアノボランティアさん担当スタッフ:E.Z)

ooh-vanguard!

大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

第4回

ハンセン病療養所訪問記

（藏座江美）

熊本に住んでいながら、ハンセン病のことも菊池恵楓園の存在さえも知らなかった私だが、当館の開館記念展ATITTUDE2002の出品作品である、菊池恵楓園入所者の遠藤邦江さんが子ども代わりに大切にしてきた抱き人形、太郎くんとの出会いがきっかけで、入所者の方々や恵楓園絵画クラブ金陽会の皆さんの素晴らしい絵画の数々に出会うことができた。以来、ハンセン病の歴史などを調べていくうちに、全国にある13ヶ所の国立療養所と2ヶ所の私立療養所へもぜひ訪れてみたいという気持ちが強くなり、今までに、鹿屋市にある星塚敬愛園、熊本の島崎にある待労院、瀬戸内市にある長島愛生園と邑久光明園、そしてつい最近では台湾の楽生園を訪れることができた。これらの療養所を訪れて感じたことを綴ってみたい。

遠藤さんの太郎くんに会うより以前、熊本学園大学主催の見学会に参加し初めて恵楓園を訪れたときの印象は、資料を読んで想像していたような暗く重々しい感じはまったくなくて、ただただ敷地の広さに、静けさに驚き、そしてなんとなく無機質な空気を感じたことを覚えている。と同時に同じ熊本に住んでいながら、ハンセン病や恵楓園のことを知らなかった自分をとても恥ずかしく思った。初めて絵画クラブを訪れたときも同じように、悲しい過去やつらい日々を表現した絵画がたくさん並んでいるのだろうと勝手な想像をしていたが、まるで幼い子どものようなひとなつこい笑顔に迎えられ訪れたアトリエには、緊張でもなんでもなくあたたかな光を発している、思い思いのタッチで描かれた絵の数々が所狭しと並んでいた。その絵を前にちょっと恥ずかしそうに、でも誇らしさげにたたずんでいる絵画クラブの皆さんを見たときに、自分の浅はかなステレオタイプの先入観にまみれている心が恥ずかしくなった。そのときに感じた「光」をたくさんの人にも感じて欲しいという思いから「光の絵画」という展覧会を開催できたことはとてもうれしかった反面、その責任の重さと何をどう伝えるべきかという問いが生まれるきっかけとなった。

その「光の絵画」の展覧会でひとつの出会いがあった。遠藤邦江さんのお兄さんで今は星塚敬愛園に入所していらっしゃる風見治さんだ。風見さん自身も能面や人物をモチーフに絵を描いていらっしゃることを知り、ぜひその絵が観たくなって、恵楓園以外では初めての療養所となる敬愛園を訪れることになった。鹿児島市からフェリーに乗って桜島を眺めながら鹿屋市に渡り、そこから車で約1時間ほどのところに敬愛園はあった。恵楓園のように壁に隔てられてはいなかったが広い平野の中にあり、夜になると一面真っ暗になるのだろうなと思った。第一印象は、恵楓園と同じ空気だということ。静かでこれだけの緑に匿まれているのに無機質な感じ。そしてまた絵画クラブのメンバーと同じようにひとなつこい笑顔で迎えてくれる入所者の方々。敬愛園に来ているはずなのに、恵楓園にいるような感覚になったことを覚えている。敬愛園はぜひお会いしたいと思いながらとうとうその願いがかなわなかった、ハンセン病国賠訴訟のきっかけともなった手紙を九州弁護士連合会に送った、小説家でもある鳥比呂志さんが入所されていたところで、島さんが住んでいた部屋はそのまま保存されていた。

風見さんの描く絵は不自由な手で描いたとは思えない繊細なタッチで、特に女性を描いている絵にはあたたかい愛情があふれている。風見さんは絵以外にも小説も出版されていて、自分の内面に向けられる強いまなざしにはいつも内省させられる。その日は療養所内にある面会者用の部屋に宿泊したが、あれほどの静けさを体中で感じた夜は初めてだった。

熊本の島崎にある待労院も近くて遠い場所だったが、2004年台風一過の秋晴れの日にようやく訪れることができた。シスターに建物の中を案内していただきながら、壁にかけられている絵を1点1点観ていく。恵楓園の絵画クラブとはまた違う祈りと願いが立ち上ってくるかのような絵の数々に、信者ではない私ですら神に対する真摯な気持ちが満ち上がってくるようだった。キャンバスがわりの柱に描きつけられた絵を目の前にするとき、絵を描く行為とは祈ることと同義だったのではないかと、今でも思う。

数ある療養所の中でどうしても行きたかった療養所のひとつが、瀬戸内市にある長島愛生園だった。ハンセン病の歴史をたどる中で避けて通れない人物がいる。光田健輔、長島愛生園の園長を長年務め文化勲章を受けた人物である。当時不治の病「らい」と呼ばれ忌み嫌われた伝染病（本当はらい菌の感染によっておこる感染症だったのだが）を研究対象にし、文字通りハンセン病に一生を捧げた彼の資料を読み近づこうとすればするほど逆に距離を感じてしまっていた私は、ぜひとも長島に行きたい、行けばなにか漠然と感じているものがはっきりするかもしれない、そう思って訪れた。第一印象は、遠かった。島をつなぐ橋ができ交通の便がよくなってさえ遠いと感じる場所。唯一愛生園にあった高校で学ぶために恵楓園からもこの愛生園に何人も滞在したという。親元から離れ、また恵楓園からも遠く離れたこの地での生活はどのようなものだったのだろうか。残されている校舎の一部や体育館、校庭を見る限りではよくある昔の学校と変わりなかった。光田健輔が愛生園に赴任したときに上陸した波止場もそのまま残されていたが、入所者はそこから遠く離れた波止場の利用を義務付けられていたと案内していただいた入所者の方から伺った。恵楓園には残っていないだけかもしれないが、愛生園には島にたどり着いてすぐ収容される建物があり、そこで着ていたものから所持品まで消毒されていたらしい。恵楓園や敬愛園では一度も感じたことのなかった、療養所ではなく収容所だったのだという過去を思い出すに事欠かない歴史の爪あとがいたるところに残されていた。

その愛生園には生い茂った蔦に囲まれた資料館がある。その中でまず目にとびこんでくるのが、入所者の手によって制作された長島全景の模型だった。小さな電柱から段々畑にいたる細部まで緻密に作られている。とても不自由な手での作業とは思えない出来栄えだった。そこに赤い線がひいてあり、なんの印か尋ねると入所者の立ち入り禁止区域をあらわしてあるとのこと。恵楓園や敬愛園でもあったであろうことが、ここ長島ではダイレクトに伝わってくる。そんな中でもやはり絵を描いている人がいた。風景画が多かったが、ハンナ・リデルやダミアン神父を模したものもあった。絵を描いている人にお会いすることはできなかったが、どのような気持ちで、どのような思いを込めて描かれていたのか想像すると、絵の前から動けなくなってしまった。ここ長島でも戦時中には収容人数をはるかに越える患者が入所していたという。劣悪な環境の中で、それでも人は表現することを欲し、実際に表現していたのだと思うと生半可な気持ちで対峙することはできないと思った。「恵の鐘を鳴らしてごらん」と言われ、おずおずと鳴らした私は「もっと大きく鳴らさないと島中に響かないよ」と笑われてしまった。今度訪れたときには島中に鳴り響くほど力いっぱい鳴らしたいと思う。

お隣の邑久光明園は小高い丘の上に位置していて、天気がよければ小豆島が望めるという、風景明媚な場所だった。その風景すらも入所者にしてみれば、恵楓園の壁以上に社会との隔離を感じさせるものであったに違いない。美しければ美しいほど残酷さは増したと思う。なけなしのお金でなんとか島を脱出しようと島の漁師の舟に乗せてもらい、着いたところは島の反対側だったということもしばしばあったらしい。無知とはここまで人を残忍になしえるということを、たんたんと語られれば語られるだけ深い悲しみを感じずにはいられなかった。邑久光明園を脱走しようとした者を罰するための監禁所は園から離れた小高い山にある。案内してもらったそこはいわゆる牢屋以外のなにものでもなかった。壁に残された毛筆の跡に目をそらしてはいけないと、決して忘れてはならないと心に誓った。邑久光明園を案内してくださった入所者の方に駅まで送っていただいて、孫のようだとオリーブの林を見ながら一緒に食べたアイスの味は忘れないと思う。

そして、台湾の楽生院。地下鉄建設のために立ち退きを余儀なくされているが、約50名の入所者は以前と変わらない長屋のような部屋に暮らし、その横には新築のきらびやかな病院兼入所施設が聳え立っている。案内をしてくれた張さんは、「第2の隔離だ」と言って、絶対に立ち退かないと語気強く話してくれた。台湾の入所者でご高齢の方は日本語が話せる。ハンセン病という過酷な状況に加えて日本軍の占領によって日本語教育が施された過去を思うと、日本語で話ができることがうれしい反面複雑な心境になった。張さんの案内でその真新しい病室を訪れるとベッドの上に貞さんが座っていらっしゃった。大学ノートやスケッチブックにサインペンやマジックで描かれた絵には、ところどころ日本語の歌詞が書かれていたり、水辺の風景や小鳥などが何枚も何枚も書き付けられていた。「恥ずかしいから、いいところだけ撮っていって」とおっしゃる貞さんに、「小鳥がお好きなんですか」と尋ねてみると、「簡単に描けるから空いたスペースに描いているだけ」という答えに、その場にいたみんなで笑ったこともいい思い出だ。絵を描くのがとにかく好きでそれだけで描いているということがひしひしと伝わってくるその絵を、いつか紹介することができて、このとき感じた和やかな空気を少しでも感じていただけたらうれしいことだと思う。

栗生楽泉園、奄美和光園、沖縄愛楽園、松丘保養園、韓国のソロクト島などまだ訪れていないハンセン病療養所はたくさんあるが、そこを訪れ新しい出会いと忘れてはならない過去と現実を見つめることで、私の心の中に浮かんでは消える漠たる疑問をはっきりとさせ、私のようにその存在を知らなかった人たちになにかしら伝えることができるように、これからも療養所を尋ね歩きたいと思う。

「長島愛生園歴史館」

「新良田教室と体育館跡」

「光田氏が上陸した波止場跡」

「待労院入口にあるマリア像」

お知らせ

・アート・ガマダス　Art Gamadas(AG)第4巻が完成いたしました。これは毎年発行している熊本市現代美術館の年鑑誌で、今号は2004年度の活動のすべてが記録されています。主に、鉄腕アトムの軌跡展、生人形と松本喜三郎、海老原喜之助生誕100年祭ー画家再生、熊本アートパレード第16回熊本市民美術展、熊本の華人展、キューレーターズ・セレクション[CAMKコレクション。]、横尾忠則ー熊本・ブエノスアイレス化計画等の展覧会に関連して行われた講演会すべてが、ボランティアさんの協力を得て、文字化されています。横尾忠則＆轟悠トークショーなど、さまざまな興味深い話が盛りだくさん。ぜひご一読ください。
今回は530ページ、本体料金 2,800円（送料 340円）で、美術館受付もしくは通信販売でお求めいただけます。

編集後記

今号は、芸術の秋を彩ったイベントを振り返る内容となりました。はしご酒やストリートアートブレックスなど中心市街地の活性化に関する事業に参加しましたが、今後とも、街の真ん中にある美術館ならではの活動を展開してまいります。
また、アートパレード審査員としてアラーキー（荒木経惟）さんにご来館いただきました。記念講演会でも紹介された個展「東京人生」を拝見したところ、初公開作品が多数展示されており、熊本滞在中も間断なくシャッターを切り、フィルムを次々と交換する姿を鮮明に思い出しました。40年以上ずっとハイ・スピードで走り続ける超人的な仕事ぶりの一方で、美術館スタッフの人生相談にも乗ってくださった東京下町っ子の心優しい一面も、作品からじんわりと伝わってきました。
今年も、アーティストとの素敵なひと時を、来館者の皆様にさらに多く体験していただけるよう、スタッフ一同励んでまいります。

編集長　冨澤治子

●執筆者一覧　＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

Shozan Kaneshiro（書道家）
Tanso Moriyama（書道家）
Yoshiko Honda（熊本市現代美術館主任学芸員）
Emi Zoza（熊本市現代美術館学芸員）
Haruko Tomisawa（熊本市現代美術館学芸員）
Akiko Sakamoto（熊本市現代美術館学芸員）
Aki Ashida（熊本市現代美術館学芸員）
Akane Takeda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
Nana Izu（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
Saki Yakabe（熊本市現代美術館学芸アシスタント）

●発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.31
2007年2月発行（冬号）　○無料○
●発行人／南嶌　宏　編集長／冨澤　治子　●印刷／コロニー印刷
●デザイン／（有）松永　社デザイン事務所
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7892